

英国農業篇 第十一卷



耕作必用

西洋農家訓

農学簡明

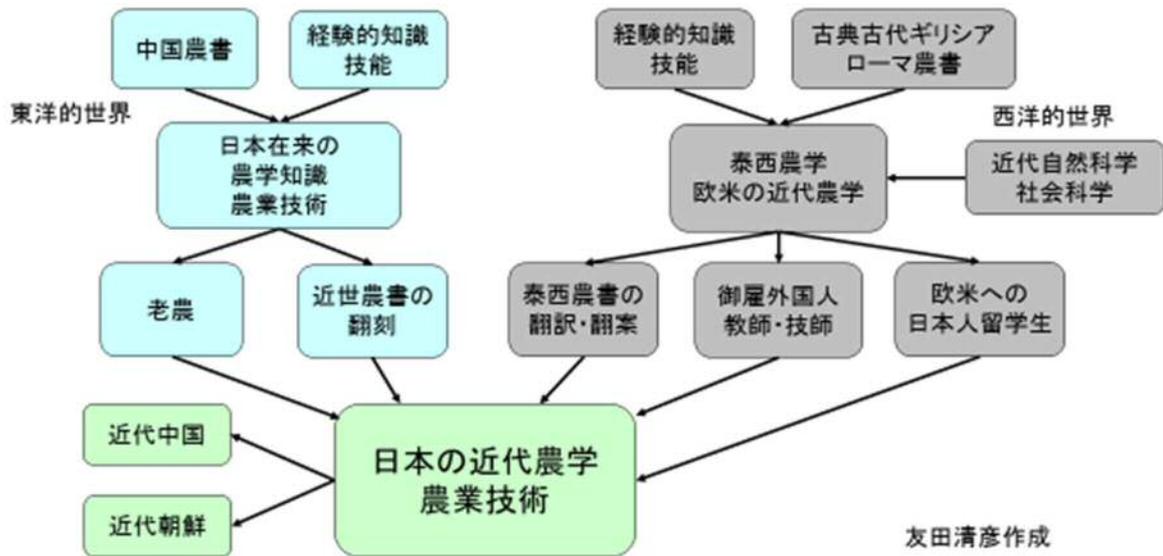
## 大学史資料室所蔵史料の紹介(六)

### 貴重書室から―その二 明治初期の翻訳農書―

日本の近代農学の源流を探ると、大きく二つの流れがあることがわかる。一つは日本在来の農学知識や農業技術である。稲作や養蚕の分野では、その影響はとくに大きい。明治初期には、近世農書の翻刻や、老農たちを通じて、日本の近代農学の成立に寄与した。二つ目は、欧米の近代農学である。これはおよそ三つのルートを通じて、日本に導入された。御雇外国教師・技師を通じたルート、欧米への日本人留学生の派遣というルート、そしてもう一つが、当時「泰西農書」と呼ばれた欧米農書の翻訳・翻案である。明治初期の泰西農書について先駆的な研究を行った斎藤之男氏は、「農学の知識の大衆的浸透・啓蒙を狙う翻訳農業書の発刊は明治一〇年代までの泰西農学摂取の重要な手段であった」（『日本農学史―近代農学形成期の研究―』一九六八）と評価している。

東京農業大学図書館大学史資料室が管理する貴重書室には、明治初期の「泰西農書」が何点か所蔵されている。一八七三年（明治六）に刊行された『西洋農家訓』（バローほか原著、神田豊訳、仏国）、七五年（明治八）刊行の『農学簡明』（ジョンソン原著、志賀雷山訳、英国）や『斯氏農業問答』（ステファン原著、後藤達三訳、英国）、また七六年（明治九）に刊行の『耕作必用』（ボンメル原著、小倉勝全ほか訳、米国）、さらに後述の『英国農業篇』などである。もう少し後、明治二〇年代になると、『農理原論』（ノルトン原著、永田健助訳、米国）などもある。これらはいずれも和装本で、泰西農書と呼んで違和感はないが、同じく明治二〇年代を中心に全五冊で刊行された『農業経済論』（ロッシェル原著、関澄蔵ほか訳、独国）となると、すでに洋装本で、泰西農書と呼ぶよりも、欧米農書と呼ぶ方が適当であろう。なお、図書館では、このほかに明治期の代表的な泰西農書として『斯氏農書』（ステファン原著、岡田好樹ほか訳、英国）も収蔵しているが、なぜかこれは貴重書ではなく、一般書の扱い（ただし禁帯出）となっている。前出の『斯氏農業問答』は、問答体で記述された『斯氏農

# 日本における近代農学の源流—概念図—



書』の簡約版とも言える。

ここでは、『英国農業篇』を泰西農書の事例として取り上げ、同書の内容と翻訳者である岡田好樹について解説してみたい。なお、『英国農業篇』は、書名の通り、英国農書からの翻訳であるが、当時出版された泰西農書の中では英国農書が最も多い。これは、わが国高等農業教育機関の嚆矢とされる駒場農学校で、最初の教師陣としてイギリス人教師たちが招聘され、イギリス農学・農法が教授されたことにも通じている。

明治十一年（一八七八）三月に勸農局から刊行された『英国農業篇』全一卷は、明治八・一五〇一七年（一八七五、八二〇一八四）に刊行された『斯氏農書』全六四冊に次ぐ大部の英国翻訳農書で、明治三・四年（一八七〇・七一）に刊行された『泰西農学』全八冊と合わせて、明治初期の三大翻訳農書の一つである。大蔵大輔兼勸農局長であった松方正義の撰文になる明治一〇年七月付けの序が付されている。「例言」に拠れば、「原著ハ「ブリチシ、ファーミン」ト題シ（すくどらんとん）蘇格蘭（中略）ノ農学家ジョン、ウヰルソン氏ノ原撰ニシテ彼紀元一千八百六十二年ノ刊行に係る。すなわち、John Wilson がエジンバラで一八六二年に刊行した British Farming の第九版が原著であった。これを岡田好樹が抄訳したものが、『英国農業篇』である。抄訳については、「原書中本邦ノ農事ニ適切ナラサルモノハ之ヲ節畧シテ訳セス但シ勸農局農学校教師英人ジョン、カスタンズ氏



英国農業篇

ノ取捨スル所ニ係ル」とあるように、駒場農学校のイギリス人教師の一人である John D. Custance が係わっている。その目次は以下の通りである。

- 卷之一 第一篇 農業機械及器具ヲ論ス
- 卷之二 全前 農産調理器械 第二篇 土地耕勸ノ準備ヲ論ス
- 卷之三 第三篇 耕作事務ヲ論ス 第四篇 耕種交代ノ法ヲ論ス
- 卷之四 第五篇 肥料ヲ論ス
- 卷之五 第六篇 耕種物ヲ論ス 穀物
- 卷之六 第七篇 全前 根菜
- 卷之七 第八篇 全前 牧草及芻類
- 卷之八 第九篇 全前 有限耕種物 第十篇 家畜ヲ論ス
- 卷之九 第十一篇 全前 第十二篇 全前 乳酪場
- 卷之十 第十三篇 全前 羊
- 卷之十一 第十四篇 全前 第十五篇 荒地開拓

法ヲ論ス 附録

## 英国農業篇 全十一巻



明治初期翻訳農書の多くについて、翻訳者の経歴や業績には不明な点が多い。前出『泰西農書』の訳者である若山儀一のように、『若山儀一全集』上下巻すら出版されている例外中にもあるが、それはごくわずかである。『英国農業篇』の翻訳者・岡田好樹についても、これまで生没年す

ら明らかになってこなかった。それが、中井えり子氏の『官許佛和辞典』と岡田好樹をめぐって』『名古屋大学附属図書館研究年報』六(二〇〇七)によって、経歴や業績の一部が明らかとなった。中井氏の研究に拠りつつ、略述しておく。

岡田好樹は一八四八年(嘉永二)おそらく長崎に生まれた。長崎唐通事出身の著名な英学者・何礼之がれいしから英語を学んだあと、何礼之や宣教師として来日していたフルベッキらとともに、長崎奉行所の洋学教育機関である済美館英学局で教授として英語を教え、維新後も明治政府に接収され広運館と名前を変えた英学局の教授・英語教導を勤めた。次いで中央に上がり、文部省編輯寮九等出仕となり、さらに外務少記として寺島宗則に随行してイギリスに渡った。帰国後、外務三等書記官、間もなく内務省出仕に転じ、一八七七年(明治一〇)には同省図書局御用掛となった。同省少書記官、権大書記官を歴任したが、一八八六年(明治一九)非職を命じられた。この間、『英国農業篇』のほか、前出の『斯氏農書』を翻訳している。明治初期の啓蒙的な開明官僚の一人と評価できよう。逝去は一九二六年(大正一五)であるが、下野後の経歴については不明な点が多い。

国際食料情報学部長 友田清彦

## 東京農業大学の人々(五)

### ― 農事試験場生みの親・沢野淳 ―

わが国において、食料や農業・農村に関する総合的研究を行っている国立研究開発法人が、農林水産省所管の農業・食品産業技術総合研究機構、通称農研機構である。農研機構は、二〇〇一年(平成一三)に、当時の農業研究センターなど一二の国立研究機関を統合再編し発足したもののだが、これら農業関係の研究機関の淵源を辿ると、一八九三年(明治二六)に設置された農商務省農事試験場に行き着く。その生みの親であり、初代場長を務めたのが、ここに紹介する沢野淳である。沢野は横井時敬の駒場農学校時代の同期生(農学科二期生)であった。ちなみに、同期の卒業生には、明治日本の農学・農政を築いた人材が多数いる。横井と首席を争ったライバルで、農会法や産業組合法の制定などに農務局長として辣腕をふるった酒匂常明、若くして逝去したが、のちに派生する農学系諸学会の母体「農学会」創設に中心的役割を果たし、初代幹事長を務めた大内健などである。

沢野淳が東京農業大学の前身であった東京農学校と係わるのは一八九五年(明治二八)からである。その前年十月、榎本武揚は東京農学校の経営を徳川育英会から譲り受けると、翌九月四年四月、評議員制度を設け、横井、沢野の他、駒場農学校出身者では、押川則吉(二期生)、



澤野 淳

豊永真理（五期生）、長岡宗好（六期生）、札幌農学校出身者では渡瀬寅次郎の計六名に評議員を委嘱した。しかし、経営は上手くいかず、行き詰まった。かくて、一八九七年（明治三〇）一月、榎本は大日本農会に本校の一切を寄付し、ここに大日本農会附属東京農学校が誕生した。横井時敬は教頭となり、また十人の商議員が新たに委嘱された。横井、沢野ら五人は、引き続き商議員となった。沢野は一九〇三年（明治三十六）に逝去するが、それまで商議員として、存立危機の時代から、常盤松への移転、東京高等農学校への改称と、横井らとともに本校の発展のために大きな役割を果たした。

沢野淳は一八五九年（安政六）四月、三田藩家老の長男として、現在の兵庫県三田市に生まれた。近代日本化学の始祖とも評価される川本幸民塾（三田英蘭塾）に学んだが、のち東京に出

て駒場農学校に入学、一八八〇年（明治一三）同校農学科、さらに八三年農芸化学科を卒業した。卒業後は、農商務省農務局御用掛、技手、技師試験を経て、一八八九年（明治二二）ドイツのハンブルクに出張を命ぜられ、あわせて農事の実況調査のため、ドイツ、フランス、アメリカの三国、およびインド・サイゴン地方の巡回を命ぜられた。翌九〇年帰国、欧米出張で農業に関する試験研究機関の必要を痛感した沢野は、陸奥宗光農商務大臣に農事試験場の設置を建議した。これが農事試験場誕生の発端となる。

さて、わが国初の全国的な農学系学会である「農学会」は、一八九一年（明治二四）、同会の農政意見として『興農論策』を発表した。起草に当たったのは大内健、古在由直、沢野淳、志岐守秋、横井時敬である。横井が晩年の回想で、「之は興農の手段として農学校農事試験場及農会の三つを挙げて詳論した者で（中略）就中農事試験場つげた附り巡回講話といふ一條は過半採用された者で後に中央試験場が出来る時に沢野氏は農務局に在ったが大に此論策を振廻した者でありまして凡そ中央試験場一つ農区試験場六、論策では五ヶ所各府県各一つと云ふ試験場の設立は大体此論策に則った者であります」と述懐しているように、農事試験場の項目を担当し、その実現を主導したのも沢野であった。すなわち、一八九〇年（明治二三）年七月、農務局に五つの課が

置かれると、沢野は第五課長に任ぜられた。このとき横井時敬も第一課長に任ぜられたが、間もなく横井が農商務省を辞したため、沢野は第一課長も兼任することになった。この兼任は短期間で解かれたが、その後も第五課長として、さらに第一課長専任として農事試験場の創設に尽力した。かくて、一八九三年（明治二六）四月、農商務省農事試験場（西ヶ原）が置かれ、沢野は初代場長となった。さらに六月には、大阪・広島・徳島・熊本・宮城・石川に支場が置かれた。沢野は一八九九年（明治三二）三月、学位を授与され、横井時敬や新渡戸稲造とともに日本初の農学博士となったが、同年七月、大阪出張中に胃潰瘍のため客死した。

（国際食料情報学部長 友田清彦記）

当資料室では東京農業大学史に関する資料をひろく収集しております。東京農業大学史関係資料や、各種情報などがございましたら、どのようなことでも結構ですので、左記までご一報くだされば幸いです。

東京農業大学

図書館 大学史資料室

〒156-8502

東京都世田谷区桜丘1-1-1

電話…03-5477-2526

FAX…03-5477-2546